

青少年のICT活用のためのリテラシー向上に関するワーキンググループ（第3回）  
議事概要

1 日時

令和5年4月20日（木）10:00～12:00

2 場所

WEB会議による開催

3 議題

(1) 開会

(2) 議事

① 今後の取組の柱を整理したロードマップ骨子（案）

② 青少年のICTリテラシー向上に関する取組について

・デジタル・シティズンシップに関する教材開発の取組について

・「インターネットトラブル事例集（2023年版）」について

③ 意見交換

(3) 閉会

4 出席者（敬称略）

(1) 構成員（主査及び主査代理を除き五十音順）

中村主査、上沼主査代理、石田構成員、尾上構成員、尾花構成員、佐和構成員、富永構成員、中川構成員、益川構成員、森構成員、山口構成員

(2) オブザーバー

株式会社 NTT ドコモ、KDDI 株式会社、ソフトバンク株式会社、楽天モバイル株式会社、（一社）電気通信事業者協会、（一社）テレコムサービス協会、（一社）全国携帯電話販売代理店協会、（一社）安心ネットづくり促進協議会、（一財）マルチメディア振興センター、（一社）モバイル・コンテンツ・フォーラム、（一社）ソーシャルメディア利用環境整備機構、アルプスシステム インテグレーション株式会社、デジタルアーツ株式会社、こども家庭庁、文部科学省

(3) 発表者

みずほリサーチ&テクノロジーズ株式会社

(4) 総務省

【情報流通行政局】田邊情報流通振興課長、赤間情報活用支援室長、加藤同室課長補佐

【総合通信基盤局】廣瀬消費者行政第一課長、竹内同課課長補佐

## 5 議事概要

### (1) 開会

事務局より、ウェブ会議による開催上の注意事項の案内、配布資料の確認を実施。

### (2) 議事

#### ①今後の取組の柱を整理したロードマップ骨子（案）

事務局より、資料WG 3-1に基づき説明を行った。主な意見の概要は以下のとおり。

○セグメントの定義について、青少年といっても小学生と高校生ではまったく事情が異なる。特にリテラシー向上の観点で考えると、未就学児と小学校低学年はそれぞれの括りを取り出して実態把握、抑えておくべき事項を検討すべき。

（中川構成員）

○生成系A Iが発展してきている中で、生成系A I×ボットを使った偽・誤情報の蔓延やその影響力工作に対して人々がどう向き合えばよいか、並びにA Iを使ってどのように調べ物をしたり、自分の作業に生かすかといった点は今後重要性を増してくる。使える人と使えない人で大きく生産性も異なってくるので、誰一人取り残さないという意味でもフォーカスしていくべき。（山口構成員）

○（資料WG 3-1）6ページ目の世代共通課題の部分で、「インターネット上で自分の好みの情報や自分と似た意見に触れやすくなる特性・仕組み」への理解の前提として、まずはインターネットの基礎的な仕組みそのものについての理解という項目を入れるべき。よって、3ページ目の目指すべきゴール像の部分でも、ICTを活用する前にICTを理解しているということが表現として入れた方がよい。

（森構成員）

○インターネット上の特性に関する理解で重要なポイントは、用語を知っているかどうかではなく、実際に起こっている現象について正しく理解できているかどうかである。また身に付けるべき能力という点では、A Iの活用も視野に入れたうえで、インターネット上の情報を取捨選択する能力やデジタル技術の利活用に当たっての課題を発見する能力も入れるべきと考える。（尾花構成員）

○現在設定されている身につけるべき能力は、すべてデジタルの世界の中での能力として定められているが、その一步前のデジタルとアナログを使い分ける力や組み合わせる力も必要なのではないかと考える。（益川構成員）

○フィルターバブルなど、知識を得るだけでなく、体験できるようなプレイグラウンドや地域のコミュニティ等における実証的なプログラムとして入れ込めたらよいのではないか。(モバイル・コンテンツ・フォーラム 岸原様)

○青少年といっても小中高校生と幅があり、コンテンツは個別に届けて行く必要がある。よって、習熟度の計測方法について青少年においてはより細かい項目による計測をしていくべきではないか。(石田構成員)

○学校現場においては子育て層を巻き込むことが大きな課題となっているため、優先セグメントに青少年とそこに関わる子育て層があるのは大変重要であり、学校現場としては大きく期待している。

また、この分野は他の教科等と比べて、親や保護者もしくは教師が子どもたちに教えていくということが成り立たないため、どのように子育て層にアプローチしていくのかが重要であり、青少年と子育て層で一緒に何かしらの施策を取って、その場を設けて考えていくことが大切。(佐和構成員)

○子育て層への展開について、中長期的取組事項として日本PTAという全国組織と連携した発信や、民間事業者が提案しているPTA専用クラウドサービスやPTAアプリの活用が考えられる。(尾上構成員)

○(資料WG3-1)5ページ目について、現場を見ていると青少年と子育て層の現状にあまり差があるようには感じられず、場合によっては青少年の方がリテラシーレベルが高い可能性もある。それを念頭に、青少年がデジタルを用いた教育を受けている中で、子育て層の世代では求められなかったものを青少年は求められているという点を子育て層が理解する、理解できる機会を設けることが必要である。(富永構成員)

○身に付けるべき能力について、議論をしていくと様々な観点から身に付けるべきと考えられる能力がどんどん増えていくため、逆に何が要らなくなるのかという視点も大事なポイントになるのではないか。(中村主査)

## ② 青少年のICTリテラシー向上に関する取組について

・デジタル・シティズンシップに関する教材開発の取組について

みずほリサーチ&テクノロジーズ株式会社より資料WG3-2に基づき説明を行った。主な意見、質疑応答は以下のとおり。

(質疑) 有用性と理解度の観点で、気づいたこと、感じたことがあれば教えてほしい。  
(応答) まず有用性の点について、保護者を対象に正解がないものに対して、同じような立場の人たちと会って話をすると自分とは異なる考えがあることを学ぶきっかけとなった。これが対話型で実施したことの有用性であると感じた。

次に理解度の点について、事前の点数が低い人の方が実施後の点数が上がるという結果が出たため、ボトムアップに寄与すると考えている。翻って、レベル3からレベル4といったより高いレベルにいきたい人たちへは別途アプローチが必要ではないかと感じた。

○アンケートにおいてオフラインで実施したのにオンラインでの実施希望が多かったという点は非常に重要な点であり、今後オンラインでどのように効率よく展開していくか検討することが非常に大事である。また点数が低い人への効果が高いのであれば、参加へのハードルを下げる等工夫をして、そういった方々を巻き込めるような方法の検討も大事になる。そしてどうしたら面的な広がりができるかという点も今後の課題である。(山口先生)

○今回の実証が平日日中ということであったが、日中休むことができない方々にもコンテンツを届けられるよう、私たちとしても協力できるところはしていき、興味のある方だけに留まらない形を一緒に模索したい。(富永構成員)

○こういった実証や調査は首都圏で実施されることが多いので、ぜひ首都圏以外でも実施してほしい。(尾上構成員)

(質疑) どのような方であれば講師となり得るのか、またどういった方を講師として想定して講師用ガイドを作成しているのか。

(応答) 今回は講師をファシリテーターという呼び方をしていたように、講師については専門性というよりはコミュニケーション能力の高さを重視していた。ワークショップでは、様々な属性の方がグループに入るように工夫した。そのため全員の意見を満遍なく引き出せるような配慮ができる方になっていただきたと考えており、講師用ガイドにはそのような運営に係るポイントを書いている。

○企業の協力を得てこのような教材を活用した社員研修（eラーニングも可）を行うことができれば、属性に関係なく様々なタイプの方々が学ぶことができるのではないか。(尾花構成員)

・「インターネットトラブル事例集（2023年版）」について  
事務局より、資料WG 3-3に基づき説明を行った。主な意見の概要は以下のとおり。

○この分野の授業スキルは現場教員間の差が大きいため、教職員参考資料は丁寧に

作り込む必要がある。(中川先生)

○これまでのインターネットトラブル事例集は教える側に使って頂くために教職員・保護者向けという位置づけで作成してきたが、大人が説明するのが難しい現状を鑑み、今年はこどもに直接読んでもらう内容に切り替えた。事例を漫画で表現し、解説等もこどもたちに向けてのメッセージとなっている。これまでのような詳しい解説等はWebサイトに掲載してあるが、指導案については全事例分あることが望ましいため、別途予算を取る等して取り組んでほしい。(尾花構成員)

○啓発講座を実施していると講座内容を自分事として受け取れないという意見が多く寄せられるが、今回のインターネットトラブル事例集は自分にもあり得るという印象を持たせるものになっており、自分事として考えられるつくりになっている。(石田構成員)

○インターネットトラブル事例集が I L A S や現在検討中の指標等との連動性もったものにするにより分かりやすくなる。

また、青少年が自分事として捉えることができるよう、小さく失敗できる環境をつくるべき。(上沼構成員)

○このような事例集はこれからますます重要となってくるが、こどもたちの目に触れさせることが一番難しいため、広報や周知の仕方など、こどもたちが出会える仕掛けをつくっていく必要がある。(佐和構成員)

### ③ 意見交換

○デジタル・シティズンシップを身に付けてもらうための学びを提供するという点において教材の見直しは不可欠である。また、インターネット上でのリテラシー向上に関わる講師の方々には、ファシリテーション能力を身につけていただくことも重要。講師の登録においても、ワークショップ型セミナーのファシリテーターができる講師かどうかの判断材料があるため、そのスキルを習得したい講師のためのセミナー等も開催してはどうか。修了した講師にフラグをつけ、OJT等、次のステップに進めるといった“スキルアップ体制”への変更が急務である。(尾花構成員)

○青少年についてはこのWGで議論を進めているものの、青少年以外の層について、具体的にどんなコンテンツを作成し、どう普及啓発をしていくのかなど青少年と比較して議論していないので、場合によってはWGをもう1つつくるなどして、重

点的に考えていくべき。(森構成員)

○この分野は授業で扱う必要性が高まってきているため、教師への啓発も進めていくべきで、難しいことは承知しているが、教育委員会へもアプローチしていくべき。  
(中川構成員)

○大人の世代も含めたリテラシー向上は全国民の情報社会対応力をアップさせるという非常にスケールの大きな話であるため、総務省だけでは完結せず、関係省庁も含めて取り組んでいき、政策のトッププライオリティに据える必要がある。よって、我々が議論していることの重要性、政策の中での優先順位をいかに上げるのかということが最重要課題。(中村主査)

以上